

全ての子どもが未来を創る体育学習

—「自ら学習を調整する力の育成」—

●—— 令和6年度の研究について

1 はじめに

私たちは幼い頃に「宇宙旅行に行きたい」「ロボットに身の回りのことをやってもらいたい」など、誰もが未来への夢を思い描いていたはずである。これらの夢は、近年のAI技術の発展などにより、解決困難と思われていた課題を解決し、人々の生活をより豊かで幸せなものにしてきた。一方で、新型コロナウイルス感染症が猛威を振るったり、水害などの自然災害により甚大な被害を受けたりと私たちを取り巻く環境は凄まじく変化している。2030年から2060年ごろまでの近未来、テクノロジーの進化によって目の前にいる子どもたちの生活がどう変わるか、学校教育がどう変わるかは全く想像もつかない。このように、現代は「先行きが不透明で、将来の予測が困難な状態」を意味する「VUCA時代」だと言われている。この予測困難な時代を生き抜く子どもを育てるためには、変化を前提に主体的に学習に取り組むことの必要性を伝えていくことが必要であろう。

・・・このように変化が大きく先の予測が難しい時代はVUCA=Volatility: 変動性、Uncertainty: 不確実性、Complexity: 複雑性、Ambiguity: 曖昧性)の時代と言われています。そのような時代には必要となる人間のスキルも大きく変化します。

・・・今後重要性が高まっていくのは、「与えられた問題を解く」ことから「自ら能動的に問題を発見する」こととなります。

問題発見力を鍛える 細谷 功 19、23 頁

そんな中、学校教育においては教師が子どもたちに問題を与え、子どもたちは与えられた問題を解くだけの授業になっていないだろうか。子どもたちが自ら課題を発見し、自分が見つけた課題に対して友達の助けを借りながら協働的に学ぶ姿、様々なものや人と関わりながら課題を解決していく姿を授業で実現できているだろうか。

スポーツ庁の令和4年度の全国体力テストで「体育が楽しい」との回答が小学校では、コロナ禍以前の水準に回復した。一方で、子どもの体力は低下傾向にあり、体力向上の課題は多いと言える。体力テストの質問紙調査において、今後どのようなことがあれば体育の授業が楽しくなると思うかという項目に対して「自分のペースで行うことができた」との回答が小学校女子で6割近くを占めた。同様の声は小学校男子、中学校男女でもトップだった。このアンケートの結果は、体力向上の課題を解決するためには、自ら能動的に解決に取り組むことの重要性を示している。

2 研究テーマ設定について

(1) 体育科の特性について

白旗(2017)によると、「学びに向かう力」とは、「知識及び技能」や「思考力・判断力・表現力等」を、どのような方向性で働かせていくかを決定づける要素であり、学んだことの意義を実感できるような学習活動を充実させていくことが重要だと述べている。子どもたちが運動の楽しさやおもしろさ、健康や安全について触れ、「もっと運動を続けていきたい」「もっと自分の体について知りたい」と運動や自分の生活に興味をもち、目標に向かって実現していこうとする前向きな気持ちを引き出すことができれば、豊かなスポーツライフにつながっていくのではないだろうか。

また、高田(2022)は、体育科における「態度」の指導について、『運動の楽しさや喜びを味わうために必要不可欠なものと言っても過言ではない。仲間の失敗を批判したり、ルールを守らなかつたり、準備や片付けを怠つたり、危険なプレイをしたりすれば、運動を楽し

めないだけでなく、体育科の目標にある「豊かなスポーツライフの実現」及び「楽しく明るい（明るく豊かな、明るく豊かで活力ある）生活を送る」と相反する姿となり、あるべき態度の育成を目指さなければ、もはや体育科を学ぶ意味や価値が問われてしまうことにつながるであろう。』とも述べている。

さらに、梅澤ら（2021）は、主体的に取り組む態度について、「自ら学習を調整する力であり、多様なメンバーで構成される自分たちの学習状況をメタ認知し、主体的に粘り強く学ぶ力」だと述べている。

学習指導要領においても子どもたちの未来を創り出していくのは自分自身であり、よりよい未来を創るために自ら課題を発見していく力が求められている。目標を設定し、自らを省みて、調整しながら物事に取り組んでいくことができる人は、体育の授業だけでなく、日常生活をも調整し、豊かで幸せな人生（well being）を実現することができるのではないかと思う。目の前にいる子どもたちが成人して、社会に出て活躍するための土台を子どもたち自らが創り出して成長していくために、私たち教師は体育学習の中で何ができるかを常に考えておく必要があると言えるだろう。

そこで、体育科が大事にしてきた「運動やスポーツの多様な楽しみ方を共有することができるよう指導内容の充実を図ること」を、これまで同様に大切にしていこうと求められている。例えば、跳び箱運動において、もっと大きく滑らかに回るために自分の動きがどうなっているか知りたいと思った子どもは、友達からアドバイスをもらい再度挑戦（する）してみる。その友達はアドバイスだけでなく動画を撮って動きを可視化（みる）しようとする。その動画やアドバイスで課題が分かり（知る）自分の課題に合った場所で何度も練習に取り組む。粘り強く練習した子どもは、自分が目指していた動きができるようになる。自分が「できた」のは友達がくれたアドバイスや動画によって動きが分かったからであり、自分自身も何度も取り組んだ成果だと感じ、次の課題へと意欲を高めていく。自分ができたことや分かったことを友達にも伝えて（支える）喜びを感じ、さらに他の友達にもつなげていく。ここまでの子どもの姿の中に「する、みる、支える、知る」の運動やスポーツとの様々な関わりを通して、自ら学習を調整する力が育成されていると言える。

（２）これまでの本県の研究から

香川県では平成13年以降「仲間とのかかわり」や「できること」「わかること」の関連性を大切にした授業づくりについて探ってきた。学習内容を「わかる」「できる」「かかわる」と設定し、それらの内容を明確にしていくこと（学習内容の明確化）、またそれらの内容を発達段階に応じて系統的に指導していくこと（学習内容の系統性）を中心に研究を進めてきた。さらには、「わかる」と「できる」をつなぐ授業づくりを行うため、研究の成果と、学習指導要領で重点として示された内容等を踏まえて、『わかる』と『できる』をつなぐ授業づくりの要件を見出し、実践を積み重ねてきている。また、「わかる」と「できる」の間には、他者との「かかわり」や、教具や教材との豊かな「かかわり」も必要であることが明らかになっている。しかし、これまでの研究では、かかわりが目的になってしまった実践や技能に差が出てしまい、体育学習に意欲的に取り組むことができない子どもが出てしまうなどの課題が出てきた。体育学習を楽しめない子どもが、意欲的に課題解決に向かうことはできない。

同様に、令和4年度の研究を通して、各郡市からは以下に示す課題が見えてきた。

- 技能が低い子どもが活躍できるようにゲームを簡易化したはずだったが、技能の低い子どもが活躍できなかった。
- 苦手な子も得意な子も全員が技能を伸ばせるような学習形態を考えていきたい。
- 途中で活動に飽きてしまい、意欲的に取り組めない子どもがいた。授業でのねらいが一緒でも、用具を変えたり、行い方を工夫したりする必要がある。
- 個々の課題から、みんなで挑ませるべき共通課題を引き出すことで必然的にペアや

グループでの交流が生まれ、協同的な学習へと繋がっていくと感じた。

- 自分のできばえを高めることに意識が向きすぎてしまい、単元を通して、子ども同士での教え合い・関わり合いが希薄であった。
- 発達段階によって変わる言葉かけの内容や方法を今後も研究していきたい。

このことから、各都市の課題として、全ての子どもが意欲的に体育の授業に取り組める工夫について探っていきたいという思いが伺える。これまで香川県が研究を進めてきた「他者とのかかわり」に焦点を当てた実践から、自分の課題を設定して、課題解決に向けて粘り強く取り組み、できたことを実感してさらに新たな課題に挑戦し続ける「自ら学習を調整する力」を踏まえて、子どもたち自らが、主体的に体育学習に取り組む姿を目指していきたい。

3 研究主題について

(1) 研究主題

全ての子どもが未来を創る体育学習

体育科がめざす姿は「豊かなスポーツライフを実現している姿」である。その際、学びに向かう力、人間性等の「運動に親しむ」ことは、豊かなスポーツライフの実現に向けて最も直接的な関係にあると考える。主体的に体育学習に取り組み、学び続けようとする子どもの姿を研究主題に設定することで、めざす子ども像を共有して授業づくりを進めていきたいと考える。また、2022年春にスポーツ庁から出された第3期スポーツ基本計画の中に、①スポーツを「つくる／はぐくむ」、②「あつまり」、スポーツを「ともに」行い、「つながり」を感じる、③スポーツに「誰もがアクセス」できる、の3つの視点が追加された。「つくる／はぐくむ」の視点は、「社会の変化や状況に応じて、既存の仕組みにとらわれずに柔軟に対応する」という説明が添えられている。全ての人が理想を描き、スポーツに参加し続けられるような環境を整えていく必要性が示されたと言える。

「全ての子どもが未来を創る」とは、どのような姿か。まず、「全ての子ども」は、文字通り目の前にいる一人一人の子どもたちのことを指す。運動やスポーツが好きで得意な子どもだけでなく、運動の苦手な子どもも、進んで取り組めるような授業が前提だということである。当然、クラスの中にいる「配慮が必要な子ども」に対しても、適切な支援を行っていくことも大前提である。そこには、「共生」の視点が含まれるであろう。

・・・「共生体育」とは、全ての学習者が「多様性を受容し合い、それぞれの能力を最大限に発揮する」という「ダイバーシティ・インクルージョン」の理念の中で、豊かなスポーツライフに繋がる資質・能力の育成に資する体育のことです。・・・

・・・スポーツを通して、人には得意不得意があること、しかしそれを補い合えること、またどんな得意不得意の持ち主も、共にスポーツを楽しむことができることなどが学ばれる必要があるでしょう。・・・真正の「共生体育」をつくる 梅澤 秋久＋苜野一徳

次に、体育の授業の中で、子どもたちが「未来を創る」とは、どのような状況であろうか。単元を通して「未来を創る姿」とは、運動領域においては理想の動きを想像し、保健領域においては理想の生活場面を思い描きながら自らの課題を発見して、理想の動きや生活場面に近づくためにこれまでの学習経験や生活経験とつなぎ試行錯誤する中で、運動や自己の生活への認識を深めていく姿だと捉えている。例えば、ネット型の学習において、得点を取りやすいポジションや失点を防いで攻撃につなげるための動きを学び、それらを生かして、自陣でのポジショニングをボールの位置によって変化させた方がよいことを自ら考え、試そうとする姿である。これは体育の見方・考え方を「働かせる」学習の在り方と重なる。全ての子どもが「未来を創る」ためには、「見方・考え方を働かせた」学習の積み重ねが大切だと言えるだろう。一時間の授業で見た際には、課題を自ら発見し、課題解決に向けてよりよい方

法を探したり、選んだりする姿、課題解決のために練習に粘り強く取り組んでいる姿や友達と協働して解決しようとする姿が「未来を創る姿」である。課題を解決した達成感や自己の成長を感じることで、新たな課題を見付け挑戦しようとする姿も未来を創っている姿だと捉えている。子どもたちが未来を創り続けるためには、教師が授業づくりにおいて、単に運動欲求を満たすことができる教材や見た目が面白そうな教具を準備するだけでは不十分である。単元を通して、子どもたちが成功体験を積み、その経験を基にして新たな問いを生み出すことで運動の魅力に気付く「もっと運動したい」という思いを高める。「もっと運動したい」と思いを高めることで、運動に自ら関わっていこうとする子どもへと育てていくはずである。仲間と協力して課題解決できた経験を保障し、さらに見出した課題に自ら挑戦する学習を保障していくことで、「もっと運動に関わり続けたい」という思いを高めることにもなるだろう。以下に「未来を創る子どもの姿」を設定する。

《未来を創る子どもの姿》

理想とする動きや生活場面を思い描き、自己を見つめて課題を捉え、よりよい課題解決の方法を選んだり工夫したりして、他者と協働しながら課題解決に向かい、自分の成長を実感し、さらに学び続けようとする子ども。

単元を通して目指す「未来を創る子どもの姿」

運動領域においては理想の動きを想像しながら、自らの課題を発見して、理想の動きに近づくためにこれまでの学習経験や生活経験とつなぎ試行錯誤する中で、運動への認識を深めていく姿

保健領域においては理想の生活場面を思い描きながら自らの課題を発見して、理想の生活場面に近づくためにこれまでの学習経験や生活経験とつなぎ試行錯誤する中で、自己の生活への認識を深めていく姿

授業で目指す「未来を創る子どもの姿」

- ・課題を自ら発見し、課題解決に向けてよりよい方法を探したり、選んだりする姿
- ・課題解決のために粘り強く取り組んでいる姿
- ・友達と協働して解決しようとする姿
- ・新たな課題を見付け挑戦しようとする姿

(2) 副主題

—自ら学習を調整する力の育成—

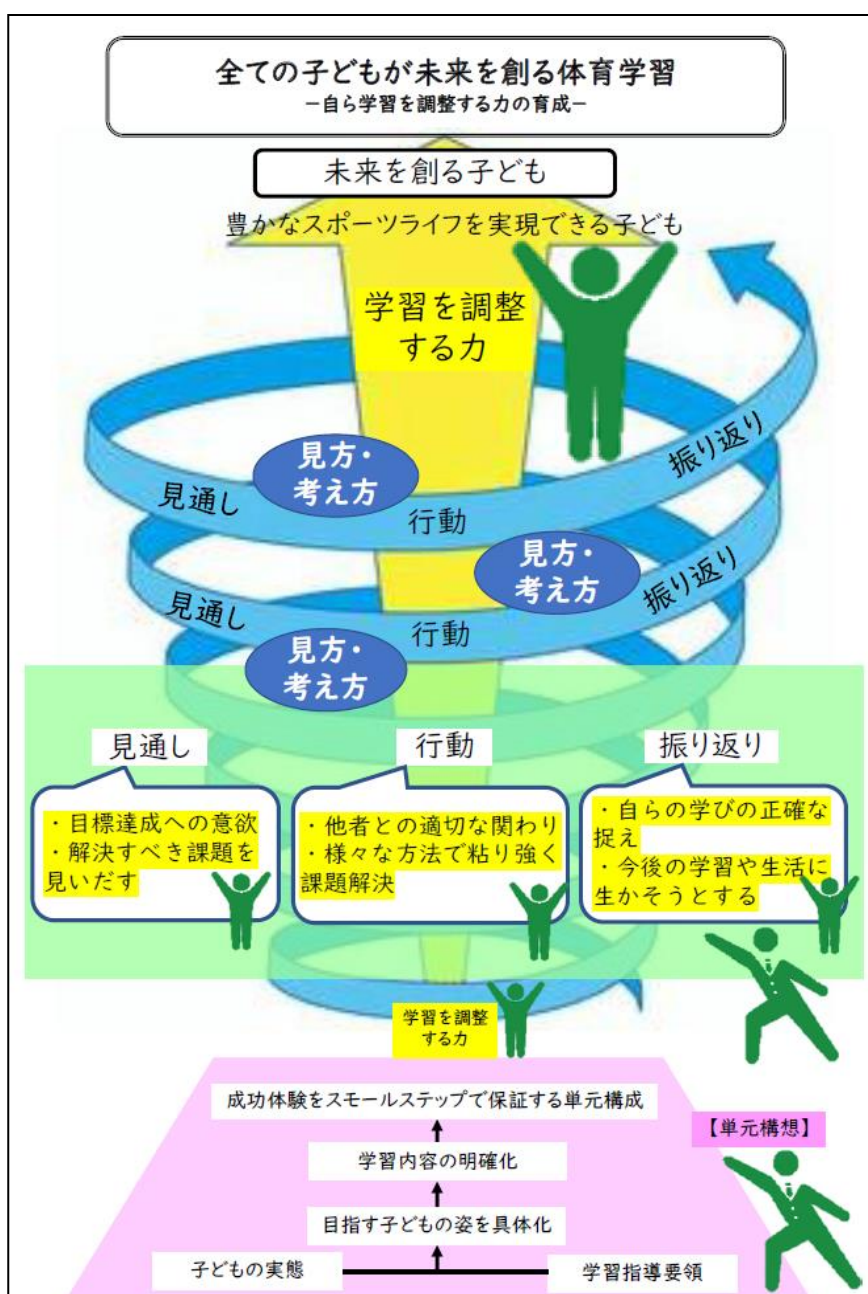
木村（2023.3）は、答えのない問題に立ち向かうことができる力と、自らの人生をより楽しく幸せにする力の2つが「自己を調整する力」だと述べている。問題の解決に向けて、知識や技能を組み合わせたり変化させたりして新しい価値を創造することができる人や、問題の解決に向けて目標を明確にし、計画を立て、紆余曲折があっても粘り強く取り組み、達成することができる人は、答えのない問題に立ち向かい解決することができる。また、目標を設定し、自らを省みて、調整しながら物事に取り組める人は、自らの人生をより楽しく幸せにすることができる。授業レベルまで下ろして考えると、「自ら学習を調整する」とは、自らの学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤することである。これには、学習について自らをやる気にさせることや、他者との関わりの中で自らの学習を望ましい方向に向かわせていくことなどが含まれる。

研究主題の説明でも述べたように、主人公は「全ての子ども」である。体育は他教科に比べ、勝敗や記録等、数値的結果によって、「できる・できない」が顕在化しやすい教科である。その上で全ての子どもが自分の運動や健康における自己の課題を捉え、その解決に向け

て主体的に学習に取り組んでいけるような授業づくりを目指していかなければならない。副主題にある「自ら学習を調整する力」は、昨年度の研究でも大切にしてきたことであるが、「する、みる、支える、知る」と関連させた取り組みに焦点を当てて研究を進めていきたい。運動やスポーツとの多様な関わりが必要であることは明らかになっているが、全ての子どもたちが、主体的に課題を解決していく姿を創り出していく授業には、まだまだ研究の余地があると考えられる。前述した質問紙調査の「自分のペースで行うことができたなら、もっと体育の授業が楽しくなる」というアンケート結果からも分かるように、子どもたちは自分たちで課題を見つけて、多様な関わりの中で運動ができるようになったという経験をしっかりと覚えていることも確かである。その経験は自分の確かな力となって、次に生かされていくはずである。まさに、私たちが目指す「未来を創る子どもの姿」ではないだろうか。

教師によって与えられた運動を消費していくのではなく、「自分たちで運動をつくっていく」と子どもたちに感じさせる視点を大切にしたい。子どもたちが自ら運動に関わっていくためには、教師のしかけによって、運動の魅力や生活場面とのつながりに気付き、「もっと、おもしろくしたい」「もっとみんなで楽しめるものにしたい」など思いを高めていくことが必要である。運動との出会いから、「つくっていく」過程で、一時間または単元を通して、自分がどのように変化していったかに気付けるようにしたい。自己の成長に気付けることが子どもたちの「また、やってみたい」「次は、これに挑戦したい」につながっていくだろう。様々な学習経験や生活経験と運動をつなぐ意識を大切に授業づくりを行いたい。生活場面や既習を運動とつなぐ場合は、一時間の授業の中や単元を通して、さらには他の単元や教科など様々な段階にあり、どこで生活・学習経験と運動を関わらせるかを教師がしっかりとねらって授業づくりをしていくことが必要である。

このような考えから、未来を創る子どもを育てるために「自ら学習を調整する力」という子どもの主体性を育成することに焦点を当てた。



【研究構想図】

4 研究の具体について

本年度、目指す子どもの姿を実現するために以下の点を大切に授業づくりを行っていく。

- (1) 領域の特性に合った未来を創る子どもの姿の具体的な設定
- (2) 全ての子どもが領域の特性に触れながら学習内容に迫り、学習課題を見いだせるような単元構想
 - ①子どもの実態を把握し、学習内容と照らし合わせた教材・教具の設定
 - ②スモールステップの成功体験を保障する単元展開の工夫
- (3) 全ての子どもが自他の課題に関心をもち、自他の成長を実感できるようにする教師の働きかけ
 - ①見通し 自らの目標に向けて意欲をもち、様々な問題の中から解決すべき課題を見いだすために
 - (例)・様々な問題の中から、課題を見いだしている姿
 - ②行動 他者と適切に関わりながら様々な方法で粘り強く課題解決していくために
 - (例)・課題解決に粘り強く取り組んでいる姿
 - ・課題解決に向けて他者と協働している姿
 - ③振り返り 自らの学びを正確に捉え、今後の学習や生活に生かそうとするために
 - (例)・今後の学習や生活に生かそうとしている姿

5 令和5年度 研究の成果と課題

(1) 領域の特性に合った未来を創る子どもの姿の具体的な設定について

本年度、各郡市から出された成果と課題の一部を示す。「未来を創る子どもの姿」については、各郡市が考える目指す子どもの姿を示すことができ、各領域における具体的な姿を共有することができた。

(2) 全ての子どもが領域の特性に触れながら学習内容に迫り、学習課題を見いだせるような単元構想

①子どもの実態を把握し、学習内容と照らし合わせた教材・教具の設定

子どもの実態を捉え、子どもの「楽しそう」「やってみたい」という運動への思いを大切にしながら、教材を設定する必要がある。もちろん、教材設定の際には、領域の特性を踏まえ、学習内容を明確にしておくことが大切である。

第6学年の「陸上運動（短距離走・リレー）」の実践において、日本代表のリレー選手の100mの合計タイムとリレータイムの差を提示し、差が生まれた理由を考えさせる場を設けることで、バトンパスによる利得距離への関心を高めた。(高松南A)

上記の実践例では、実態調査で自分の走力がチームに与える影響を心配している子どもが一定数いたこともあり、合計タイムで競うのではなく、利得距離に着目させる場を設けている。このことにより、走力に自信がない子ども等、走ることに否定的な思いをもっている子どもにとっても、肯定的な思いを抱いて運動に取り組むきっかけとなったのではないだろうか。特に、考えさせる場を設けていることに価値があると考えられる。教師から一方的にルールを提示するのではなく、子どもの気付きを大切にしながら、子どもの学びたい思いを方向付けていくことが大切である。

②スモールステップの成功体験を保障する単元展開の工夫

子どもたちが「これならできそう。」と意欲的に取り組めて、集団としての一体感や自分の成長をスモールステップで感じられることが、子どもたちの「もっと、やってみたい。」へとつながっていく。

第5学年「体ほぐしの運動」の実践において、「きょうそう縄跳び」という個人技能の習熟を必要とせず、集団での解決を必要とする教材を設定することで、課題解決の糸口が

見えやすく、子ども自らが工夫して解決する姿を引き出すことができた。(さ東)

全員に成功体験が保障された活動であり、発展させる余地のある課題であることが様々な方法で粘り強く取り組む姿勢を育む一つの要因となったと考えられる。

(3) 教師の働きかけ

①見通し場面

自らの目標に向けて意欲をもち、様々な問題の中から解決すべき課題を見いだすために、教師としてどのような働きかけができるかを探ってきた。

第1学年「器械・器具を使つての運動遊び」において、単元のゴールを忍者になることを置き、自分たちが目指す忍者像を全体共有し、忍者修行を通して一つ一つの動きを獲得できるようにした。(坂出・綾歌)

第2学年の「マット遊びの運動」の実践において、単元導入時に基礎感覚づくりの遊びの様々な場を設けることで、「逆さになりたい」「転がりたい」「自分たちのコースをつくってみたい」などと意欲を高め、単元の流れやゴールを共有した。(仲善)

第6学年「体づくり運動」の実践において、体づくりと他領域を組み合わせ、後単元の「ハードル走」の動画を視聴することで理想と現実とのずれを生み出し、自分に必要な体力や高めたい体力に着目できるようにした。(小豆)

上記の実践例は、様々な場を教師が意図的に用意して取り組みたいものを子どもたちから選ばせたり、目指す動きの全体像を示して自分に必要な課題を選択したりして、問題解決の動機づけを高め、目標に向かい続けることができるようになったと考えられる。

②行動場面

行動場面においては、自己(チーム)の課題解決に粘り強く取り組んだり、課題解決に向けて他者と協働したりする姿を目指したい。その為には、ICTなどを活用して、自己(チーム)の動きを確認し、課題について考える場を設けたり、課題解決に合った方法を提示された場や方法から選ぶ場を設けたりすることが大切である。

第3学年「走・跳の運動」の実践では、色々な姿勢からのスタートや走り方を取り入れたり、楽しい活動の仕方や場を選択したりする場を設けることで、体力や技能の程度にかかわらず競走(争)の楽しさを味わうことができるようにした。(高松南B)

第3学年「表現運動」の実践において、ペアになって活動を行うことで、模倣し合ったり、ペアから称賛されたりする場を設けることで、自信をもって活動に取り組むことができた。また、教師が活動の中で、動きの多様性や大きさを出すために、「あの木の上の鳥をつかめるくらい跳んでみよう」と具体的にイメージできるような声かけを行った。(高松北A)

第5学年「スライドサッカー」の実践において、毎試合シュート回数や点数、ボールの軌跡図を記録し、その記録をもとに話し合うことで、ディスク保持者と非保持者の動きを考えることができるようにした。(丸亀)

上記の実践例では、学習過程の中に子どもが課題解決に向けて友達と協働する場を設定している。その際、課題解決の視点を明確にしたり、自分の思いで動きを選択し自己決定できる場を設けたりしていることで、より充実した協働する姿が見られたと考えられる。学習過程の中に、子どもが粘り強く取り組んだり、他者と協働したりすることができる場を設定することで、子どもが力を発揮する機会を保障したい。その際には、課題解決の視点を子ども全体で共有したり、動画やデータ資料などの話し合いの材料を提供したり、課題解決の方法や練習の場を選択できるようにしたりするなど学習環境を整えることが大切である。友達の考えを参考にすることで、自分の動きに生かせることが見付かり、試行錯誤につながったのではないか。また、教師の声掛けにより、子どもの動きを引き出すこと

で、より、友達との活動が充実したと考えられる。

③振り返り場面

振り返り場面では、子どもたちが自らの学びを正確に捉え、今後の学習や生活に生かそうとするために、教師としてどのような働きかけができるかを探ってきた。

第4学年「ネット型ゲーム」の実践において、「〇〇だったから次は△△する」といった次の手立てが分かる記述や発言を意図的に取り上げ、動きの変容を見取って評価した。

(三観)

第6学年の病気の予防の実践において、振り返りの際に病気になりにくい、健康な体になるためにどんなことに気を付けて生活することが必要か、運動や休養、バランスのよい食生活について具体的に改善方法を見付け、マンダラチャートに書き加えることで自分自身の生活行動について多角的に見直すことができた。(高松北B)

記入の観点が明確になっているマンダラチャートを使用したことで、思考が整理され、優先順位が見えやすくなり、今後の生活に生かそうとするきっかけになったのではないか。また、具体的な数値や子どもの発言を取り上げて根拠とすることで、本時の自分の活動内容が課題解決に適切だったかを考える指針となり、次時の活動を考える手立てとなった。

6 令和6年度 研究について

令和6年度は、領域の特性にあった「未来を創る子どもの姿」を指導案上に示すこととする(指導案形式参照)。「未来を創る子どもの姿」を指導案上に示すことで、授業者だけでなく、参観する側からも単元終了後や授業後の目指す子どもの姿が明確になり、討議の視点を焦点化することができる。令和6年度の各郡市の授業については、県研究部の提案した指導案形式を使用し、令和8年度の中・四国大会(香川大会)に向けて、指導案形式の修正・改善を進めていきたい。